平成２３年度	巣鴨中学校（国語）	解答と解説

解 答

【一】

１　電池　　２　暗示　　３　流布　　４　慣習　　５　根絶
６　視野　　７　退散　　８　盛　　９　健　　10　映

【二】

問１　Ａ　エ　　Ｂ　ウ　　Ｃ　オ　　Ｄ　イ
問２　それぞれの
問３　エ
問４　拾うための特別な技術や経験、道具を必要としない点。
問５　持ち帰ったドングリの大部分が可食部分になるということ。
問６　長期間保存が可能な堅い殻で守られ、虫害を防ぐ有害成分を持っているという特徴。
問７　ウ
問８　イ
問９　ウ

【三】

問１　神が我が身に似せて創ったのが人間だと考えるから。
問２　ア
問３　スタンダー～きだという〔考え方〕
問４　ア
問５　スタンダードを決めず個別性を重んじる〔考え方〕
問６　イ
問７　「みんなと同じじゃないと」〔という気持ち〕
問８　海外で作らせることが増えて、国内の技術の空洞化をまねいたり、同じものが大量にあり、それしかないからそれを買うという状態になったりすること。

解 説

【二】出典は、阿部芳郎「考古学の挑戦」。

問２　この文章は縄文人の食料としてドングリが優れていたことを述べた文章ですが、どんな点で優れていたというのかを、各段落ごとの要点からしっかりおさえることが大切です。

１ 段落…縄文人はなぜドングリを食べ続けていたのか
２ 段落…ドングリが食料として優れていた点＝多様性を持つ
３・４ 段落…ドングリが食料として優れていた点＝収穫量が多く採集が簡便
５ 段落…ドングリが食料として優れていた点＝カロリーが高い
６ 段落…ドングリが食料として優れていた点＝回収効率がよい
７・８ 段落…ドングリが食料として優れていた点＝保存性に優れている

一読して以上のことがおさえられれば、このあとの問題も、問われていることに関係する段落を丁寧によむことで容易に答えにたどりつけるでしょう。ここでいう「多様性」とは、さまざまな土地にさまざまなドングリが生育しているということです。一種類しかないものを食料にしていると、それが不作の年はたちまち飢饉に直面しますが、何種類かのドングリを組み合わせて食料にしていれば、一つがダメになっても他のものを代わりにすることで、「安定的な食料」になるのです。

問３　トチの木に「所有権」を認めていたということは、それが田んぼや畑と同じように食料を生み出すものとしての「財産」としてあつかわれていたということです。

問４　４ 段落に、狩猟と比べドングリの採集が簡便であったことが述べられていますが、「拾うための特別な技術や経験は何ら必要なく」「必要な道具というばせいぜいカゴくらい」とあるのに着目して、制限字数内でまとめます。

問５　食料は手に入れた所で食べるわけではなく、それを村や家に持ち帰ってはじめて家族の食べ物になるものです。ですから「採集した場所から集落に持ち帰る労力」は無視できません。運ぶのに使った労力に対してどれだけの量を食べることができるかということが「回収効率」です。たとえば貝の場合、食べられない貝殻の部分の重さがほとんどで、食べられる部分はわずかに20％なので、「回収効率が悪い」ということになります。それに対してドングリは、持ち帰った重さの80％、つまり大部分が「可食部分」になるため、「回収効率がよい＝優位だ」ということに

なるのです。
問６　[7] 段落に、「また」という接続詞をはさんで、ドングリの二つの特徴があげられているのをおさえましょう。「外側を堅い殻で守られていることから～長期間の保存が可能となる」、「ドングリ類に含まれるタンニンなどの有害成分は～虫害を防ぐ役割も持っている」とあるのに着目し、制限字数内でまとめるようにしましょう。
問７　「ドングリ類を貯蔵した穴」だけでなく、「ドングリを穴いっぱいに詰めて樹皮や木片で覆いをした施設」が発見されていることに、つまり「縄文人の知恵と計画性」がそこまでおよんでいることに、驚きの感情をこめて使っています。同じような気持ちをこめて使っているのは、「僕を疑う」ことが「君」にまでおよんでいることに驚いているウです。
問８　数年先に不作になったとしても飢えて困ることがないように、事前に食料をたくわえておくというのだから、ものごとをするには、失敗しないように事前にじゅうぶんな注意をはらうことが大切だ、という意味のことわざ「転ばぬ先の杖」が適切です。
問９　問２の解説を参照してください。文章の正しい組み立て図を選ぶときには、横の並びに着目すると良いでしょう。各段落ごとの話題と要点をおさえ、並列・添加・対比などの関係になっている段落同士が横並びになっているものを選びます。この文章の場合注意しなければならないのは、[4] 段落と[8] 段落です。[4] 段落は「労働に見合う収穫」、「ホウキで集めた」、「両手ですくった」などの言葉から、[3] 段落の「収穫量が多い」ということとも関連があり、また、[8] 段落の話題は全体のまとめではなく、[7] 段落と同じ「長期の保存・貯蔵に優れていた」ということであることがおさえられれば、正答を選ぶのは容易でしょう。

【三】　出典は、玄侑宗久「しあわせる力」。
問１　「目の見えない人」と「目明き」について述べた前の段落を受けての、「キリスト教圏で」の「スタンダード」なので、人間の身体についてのスタンダードについて言っている文であることがわかわかります。ですから、キリスト教圏の人たちが人間の身体をどのようなものと考えるから「スタンダードがはっきりとしている」のかをおさえます。二つあとの段落に、「キリスト教社会では、神が我が身に似せて創ったのが人間と考えてますから～両目がちゃんと見えて、鼻もちゃんと嗅げて、口がちゃんと利けてというのが人間のスタンダード」とあるのに注目しましょう。
問２　「ぼちぼち」とは、関西方言で「ものごとの程度などが十分とはいえないが、一応は満足できるさま」を意味する言葉で、人間はそんなに立派な人もいないがみんなそれなりに満足できるように生きており、それぞれにたいした違いはない、ということです。イは「明確な違いがあると認めながら」が、ウは「人よりも劣っていると考えられている」が、エは「人よりも尊い存在であると考えられている」が、それぞれ誤りです。
問３　福祉行政は、キリスト教圏で考える「スタンダードから外れた人々」に対しておこなわれるものです。西洋はヨーロッパやアメリカを指し、「キリスト教圏」とほぼ同義なので、キリスト教圏の福祉（その始まりはボランティアリズム）に対する考え方を述べている部分を探すようにします。「スタンダードから外れた人々」に対しては「即援助すべきだ」というのが、キリスト教圏の人々の考え方なのです。
問５　「柳は緑、桃は紅」は、柳と桃を比べるモノサシなどなく、柳は緑の芽がきれいで桃は紅の花がきれいで「両方いい」と、それぞれのよさを認めることで、「みんなちがって、みんないい」のも、スタンダード（標準）などないから、どれよりどれがいい、どれよりどれが悪いという差別はなく、みんなそれぞれによさを持っているということで、どちらも同じようなことを言った言葉です。これが禅の「無分別」という考え方だというのが筆者の主張ということになります。ですから、第二段落の「無分別」の説明をよく読んでまとめるようにします。「スタンダードを決めない」「個別性を重んじる」などの言葉をおさえましょう。
問６　「よく考えていただきたい」のは、比べることなどできないものを「単純な基準をでっちあげて無理に比較している」ことについてであるから、そのようなまちがったことをするのはやめて（＝見直して）ほしいとい言っているのだろうとわかるでしょう。
問７　「均一の基準に合わせよう」は、言い換えれば、自分の方からみんなと同じになろうとしているということです。日本人みんながそうしないといけないかのような気持ちになっているのですね。
問８　――部⑧と同じ段落では、「海外で作らせることが増えた結果、国内の技術が空洞化しつつあ」ることを、次の段落では「大量にそれがあり、最悪な場合はそれしかないからそれを買う、という状態は、市場原理のみの支配する『幸福』とはほど遠い世界」になることを心配しています。